昔の法華院とその周辺

法華院からあせび小屋周辺を散策すると、ミヤマキリシマ、アセビ、ノリウツギなどの灌木が目につき、足下にはイワカガミ、コケモモ、マンネンスギなどが育っている。坊がつるの湿原には、ノハナショウブ、ハンカイソウ、オタカラコウの花が季節になると咲き乱れる。湿地の周辺にはススキが広がり、他の植物を脅かしている。これは現在のことであり、針葉樹やブナなど落葉樹の巨木・大木どころか、中木、幼木すら皆無である。ところが、かつてはこの付近には針葉樹の巨木が鬱蒼と茂った幽邃境で、九重山大明神を祀り、天台宗白水寺にふさわしい敬虔な一大霊場であった。

法華院には数百年、あるいはそれ以上の歴史が秘められており、その沿革については前節で述べた。ここでは、『九重山記』や第二十四代院主弘蔵盂夫翁の生前の語り話から、法華院周辺のむかしの風物を再現してみよう。

『九重山記』は、前述したように明和七年（一七七〇）の夏、第十八代院主勝万院に招かれた龍泉山英雄寺の芳梅聞が白水寺に參詣したおりの記録であり、明和九年（一七七二）に奉納された。そこには院主から聞きとった白水寺法華院の歴史・沿革とともに、当時の寺院や自然などの風物が記されている。ここでは、『九重山記』に記された風物を「　」で示し、必要に応じて説明を加える。

「麓から二里（約八キロ）を直上する。石の小径に雲が深く谷川が遥かに流れている。小径に入ると山の神社がある。雲のかかった樹林が深く立ちこみ、森厳な感に打たれて、神が存在するように感じる。」

芳梅聞は山麓の龍泉山英雄寺（竹田市に現存）から石原村を経由して、鍋割坂―佐渡窪―鉾立峠のコースで

昭和二十年（一九四五）秋、私（松本）が鉾立峠を通ったときには、確かに朽ちかけた柱状の木が一メートルほどの高さで残っていた。これはかつての鉾だったのであろう。弘藏祐夫氏によると、朽ちかけた柱は昭和二十二年（一九四七）頃まで残っていたらしい。昭和二十三年（一九四八）、国体に合わせて木の鉾を建てたが、そのまま朽ちてしまった。

再び『九重山記』にもどる。

「鉾峠で院主が茶器をもって迎えてくれた。しばらく休憩して、草を押し分け数歩行くと二つの土橋がある。院主が「この橋は昔玖珠郡田野村の者が何度も境界争いをして、強いて田野橋と称していたが、今は一二橋という。と語った。」

ここに説明された「二つの土橋」は何処にあったのか不明であるが、九重山大明神に参詣する途上であるから、今のあせび小屋に近く、法華院観音堂の下流にあった可能性がある。「境界争い」というのは、前節で述べた寛永九年（一六三二）の法華院第十二代勝光院豪尊のときに境界調停が成立した。それ以前の争いのことであろう。

「そうこうしているうちに、九重山大明神の額を掲げた鳥居についた。そこで恐れかしこみながら平身低頭して参拝した。右手を見るとはるかな原野（足毛山）である。」

ここにある鳥居は今のあせび小屋付近にあった。立石敏雄氏（九重風物志　一九五三）によると、終戦（昭和二十年、一九四五）のころまで、あせび小屋背後の雑木林中に倒れた大きな鳥居があったという。戦後あせび小屋修理の際人夫が焚火にしてしまって、全く影を消してしまったそうだ。「はるかな原野」とは、今の坊がつるそのものである。「足毛山」は、あせび小屋付近を指しているらしいが、今一つはっきりしない。

「原野には法華経の一石一字の経塚が七か所ある。経塚は山中に二十八か所（上宮に十二か所、山王社に一か所、先住墓所に三か所、鐘楼堂畔に三か所、湯川上に二か所、足毛山に七か所）あるとのことで、法華経二十八の品数になぞらえたものだ。」

あせび小屋付近に七か所の経塚があったことになる。弘藏孟夫翁の談話によると、若い頃経文の文字を記した小石が散乱していたそうだ。残念ながら現存する小石は一つもない。

「下宮のそばに、大乗妙典一千部読誦の古碑（供養塔）がある。このように経文を写経したり、読誦することは実に偉大なことである。当山は法華経が広く熱心に伝わった霊地であり、諸天善神の守護する所であり、国家を鎮護する大宝山であって、もっとも尊敬し帰依すべき山である。左方に雲を囲むように繁茂した幾株かの老杉がある。そのなかで大きな杉を神木と称している。その傍の石廟は熊野三所権現を勧請（神仏を移して祀ること）して祭ってある。これが下宮である。」

下宮のそばの古碑は、あせび小屋のすぐ上に梵字を刻んだ石碑があるが、これかもしれない。下宮付近には、神木とも称されるような老杉が数本あって、荘厳な霊地であったことがうかがえる。下宮はあせび小屋の裏山から観音堂上方に続く台地にあった。今でも大きな礎石や墓石が残っており、往時を偲ばせてくれる。堂塔伽藍は、おらく彩色鮮やかで壮大で荘厳であったにちがいない。

昔の院への参道は、今の大船山への別れ道の大きな岩付近からあせび小屋の下を通り、小屋の北側の小谷を登り、梵字を刻んだ岩のそばを通り、小屋の背後に建っていた鳥居から下宮にある台地に登って参詣するようになっていた。台地からの眺望はよく、坊がつるを眼下にして大船山、平治岳を望めば自然と神仏が一体となった霊感を感じたであろう（口絵写真参照）。

法華院に入っている。鍋割坂に向かうまでのことだが、ここにある「遥かに流れている谷川（泣別れの水）」、および「山の神社」は、くたみ分かれ手前の山の神であろう。ここには湧水もあった。

山の神のさらに東方の奥まった所に毒水がある。今は訪れる人はほとんどいないが、そのすぐ下流（南側）を通っているはずなので毒水について述べておく。

毒水は大船山南麓の清水山南面直下に湧出する炭酸泉の鉱泉である。決して毒を含んだ湧水ではなく、黒岳北東麓白水鉱泉と同じような甘味のない炭酸水であって、むしろ胃腸病によく効く。

古老の話によれば、大正二、三年（一九一三、四）ごろまで、小屋掛けして鉱泉水を沸かし、湯治客を相手に営業していたという。毒水の名の由来は、炭酸水の湧泉とともに多量の炭酸ガスが発生し、これが空気より重たいため水面直上に停滞してしまう。そこに水を飲みにきた獣や鳥たちが死んでしまうからの名である。現在の毒水付近は、南側の下流は開けているが、北側は自然林が茂っている清水山へと続いている。かつては、さらに鬱蒼とした自然林であったかもしれない。

「これを（山の神社）数十歩行くと、老松が数株天をさして立っている。これを松の護法という。さらに数百歩行くと老杉が石窟をおおいかくすように、陰暗く茂っている。これを杉の護王という。そのうち曲折した坂路の急坂にかかる。これを鍋破という。あるいは天の川を渡るようであり、あるいは霧をつかむようである。汗を出しながら更に登ると、木鉾が天をついて立っている。これを鉾峠という。」

鍋破は今の鍋割坂である。鍋破を登り始める付近に「松の護王」「杉の護王」と称されるような老松と老杉の巨木があったと述べられているが、現在これに相当するような針葉樹の巨木は見あたらない。また老杉におおわれた「石窟」は、その存在と場所がはっきりしない。「天の河を渡るようである」というのは、佐渡窪でのことであろう。鉾峠（ホコノトウ）は鉾立峠であり、その頃の様子を今に伝えている。

芳梅閒が明和七年（一七七〇）に鉾峠に立ったとき、峠には鉾が立っていたに違いないが、『九重山記』にはそのことが描かれていない。下って嘉永六年（一八五三）、万延元年（一八六〇）に書かれた第二十一代院主豪学の記録が残っている。書式は次の通りである（松岡実氏による）。

鉾立ヒテイ書ヨウ覚

一、ホコの長サ　一丈二尺　土中四尺　土上八尺　四天梵字ヲ書ク

東ノ方ニ熊野三山檢校宮役元　神変大菩薩正　聖護院御門跡　二品雄仁親王　九州豊後国直入郡朽網郷境地岡領

九重山白水寺法華院弘藏坊

院主　豪学敬白

時于　嘉永六発丑年卯月

如意珠日

三十三年目ニ立テカエルコト殺生禁断ノ境界目ジルシ

万延紀元年仲秋月

豪学写ス

この記録により、いまから百五十年ほど前の鉾峠（ホコノトウ　現在鉾立峠）の様子がわかる。建っているホコは金属ではなく木材のホコだったようで「梓」の字が使われている。その高さは地上八尺（約二・四メートル）あったとしてあり、四字の梵字が書かれていた。その地は直入郡朽網郷であり、法華院の境地は岡領に所属していた。また峠を境にして法華院側の境地は、殺生禁断の聖地であった。梓は三十三年目ごとに立て替えることになっていた。

下宮近辺の巨木の樹林相は幽邃境の霊地をかもしだしており、明治年間の中頃まで繁茂していたらしい。弘蔵孟夫翁によれば、その頃まで昼なお暗いほど各種の巨木が茂っており、杉、ブナの木が多かった。樹齢五百年を越え、胸高の樹周りは四、五メートルを越す巨木もあった。それが明治三十二、三年（一八九九～一九〇〇）ごろから枯れはじめ、明治四十二年（一九〇九）ごろまでにすべて枯死してしまった。これら巨木の枯株は今も二、三株残っている（船津武士氏・中垣義秀氏談）。樹木が枯木と化した範囲は三俣山の裾から坊がつるにかけ、北は湯沢山麓から平治岳山裾におよび、南は鉾立峠を越して鍋割坂の上中部にまで広がった。樹木の枯死は針葉樹に著しく、坊がつる下流の暮雨瀧上部に生育していたモミ、ツガの純林も、すべて全滅したという。当時、西千里が浜や空池内壁の北面にも三メートルほどの樹木が茂っていたが、これらも全て枯れてしまった。このおり法華院周辺の植物相も全く変わってしまい、現在の植相の原形ができはじめたと考えてよい。この枯死した原因について、硫黄山の噴気活動が激しくなったからだろう、との説がある。

「右手に、氷護法の岩と刻んだ鏡のような大石壁がある。勝光院豪尊が立てたもので、峰入り四十八度のことを略記してある。谷川の水が流れ落ち滝のようで岩の前まで流れ、渕のように水をたたえている。ここは修行者が垢離をする所である。豪尊の当山における功労は、再中興の院主と称すべきだ。日が暮れかかったので院に投宿した。谷川の水が夜になると流れの音として聞えてくる。この寺の名を清い水の白水とつけたのは当然のことである。」

氷護法の岩は、今のあせび小屋の水源近くにあって、一丈（約三メートル）ほどの大岩である。ノリウツギなどにおおわれているので見つけにくい。ここに勝光院豪尊の艱難苦行について刻まれているが、苔むしているので判読しにくい。私見だが、この場所を判りやすく、刻字を読みやすくするとよいだろう。

なお、『九重の自然と歴史』（一九九八）に、省略部分もあるが「九重山記」の現代語訳があり、「氷護王岩」が「水護王岩」と誤記されている。原文では「氷」である。この奥の岩から水が滴り落ちており、冬期の凍てつく様子からの名かもしれない。

この水は垢離（身体を清める）ができるほどの渕をつくっていたのだから、当時は今より水量が多かったらしい。院に投宿してこの清い水量の音を聞き、寺号の白水寺になったのは当然である、と感じたほどの水量があったようだ。それもこの当時は鬱蒼とした森林が茂っていたから、それなりの水量があったと思われる。現在、氷護王岩から薮分けして急斜面を登ると下宮院跡の台地に出られる。

旧参道に残る「氷護法岩」、「豪尊勝光院度数四十八度」の刻字が見える

「翌朝院主が直上、百歩ほどの所に案内した。院主は中宮の古跡だと説明した。古樹が生い茂り、奇石が高く重なっている。院主はこれが中宮の古跡であると説明した。ここを乙護法と名づけた。ここの本尊は弁財尊天であり、今（九重山記の当時）は千本坊に安置されている。」

このように「九重山記」には、院（下宮）から中宮までのことが記されていない。鬱蒼とした森林帯が院から中宮まで続くのか、どうかもはっきりしない。中宮は今の北千里が浜奥の東より（天狗が城側）にあったというから、下宮からかなりの登りと距離がある。それにもかかわらず、この付近の風物の描写がないので、近年のことを述べておく。

院跡（下宮）は数段の台地になっており、一般にススキやノリウツギにおおわれており、大きな礎石が散在している。三俣山に向かうようにススキをかき分けると、数本の杉の倒木があった。二〇〇メートルも進

むと松の枯木が立っていた。これらは昭和三十年（一九五五）ごろまでのことであるが、その後松の枯木も倒れてしまった。この松の木は、九重山の天狗様が飛ぶときの中休みをされるということから天狗松と呼ばれていた。松の木の根元には、七福人の一人の弁才天（弁天様）を祀った小さな石の祠があったが、何時のまにやら弁天様もなくなってしまった。明治の終わり頃までは、御利益があるとのことで参詣する人も多かったという。

天狗松のあった所からさらに三俣山の南面を捲くように登ると、右手の大きな岸壁の下につく。この岩の下に一丈（約三メートル）四方の護摩堂があって、護摩を焚く祈祷がなされていた。それ故にこの岩を護摩堂岩と呼ぶようになり、旧筑紫山岳会員がロック・クライミングの練習をしていた。私などもこの岩や星生崎で岩登りの訓練をしていた。前述したことであるが、明治になって神仏混交が許されなくなり、院内の石造・木造の仏像をこの岩の割れ目に隠したという。

当時、護摩堂から谷沿いに北千里が浜に登っていた。この登り口に水神様が祀ってあった。筑後川の水源ということで、筑後方面からの参詣人が多かったという。北千里が浜の平坦面に出て、猿岩（石）の下から千里が浜の奥の方へ進むと、中宮跡地に出る。中宮は天狗が城寄りの左側（東側）の平坦台地であろうと思っている。ここにも十一面観自在菩薩が祀ってあったが、廃仏毀釈政策により、明治になって直ぐに中宮と猿岩間の岩塊の隙間に隠したとのことであった。そこで弘藏孟夫翁は多くの人を使って探させたが、発見できなかったという。この付近にも樹林帯が茂っていたとされるが、現在、大木は一本もない。

「乙護法から数歩行くと、高さ一丈（約三メートル）ほどの不動岩がある。また吹越護法、さらに打越水神があり、両者ともに石窟を廟とする。また院の西南に千尋（一尋は約一・八メートルとして一八〇〇メートル）ほどの絶壁があり天狗岩がある。これがいわゆる弘藏坊である。すべて山中の鎮衛として祀ってある。」

ここに述べられた天狗岩は、中岳西隣の天狗が城であろう。院が下宮であれば西南方向に天狗が城があるから整合する。それにしても千尋とは高すぎるが、どこからの高さであろうか。そのほかの名のある石、護法、水神は現在のどれを指しているのか明らかでない。私どもが北千里が浜の中ほどにある大岩を「スフインクス岩」と呼んでいたが、勝手につけた名で正式名ではない。この岩は目立つので、古く名付けられた岩の一つかもしれない。天狗岩と弘藏坊との関係がどういう意味なのかはっきりしない。

「また泉水山麓に額に似た名がある。その形は人の額を切って望むようである。」

ここでいう泉水山は、現在の泉水山ではないが、北千里が浜に泉水山の名が付いた山峰があったのだろうか。額に似た岩というのが、前述したスフインクス岩の可能性がある。

「また上宮に行く路傍に十二の経塚がある。上宮では十一面観自在菩薩、不動明、毘沙門天の二大脇士の金躯が中天に輝き、瑞気（めでたい雲）と氤氳（天地の気が合って盛んなさま）に満ち満ちている。側に経堂の古跡があり、一個の宝甕（銭瓶）が埋めてある。ここで正月二日に山の衆徒を集め、国家安全、五穀成熟を祈祷する。そこで洗米を供えると二羽の烏が飛んできてこれを啄んだ。大明神が使わした一つがいである。不思議なことに毎年雛を育てるのにその数が増えることはない。」

中宮から上宮への参道が記されていないが、北千里が浜の奥から久住分かれを通らずに直接空池に登るルートであったかもしれない。このコースの空池直下には湧泉がある。

上宮は、今の中岳の麓の馬洗の池（御池南南東凹地）～岩室付近にあったといわれ、この一帯は賽の河原と称されている。当時の上宮寺院の様子が述べられている。かつての上宮は、久住山猪鹿狼寺の上宮と共同で祀っていた。しかし現在見る影もなく、痕跡も見あたらない。往時は厳冬期の正月二日に祈祷がなされてい